

コラム：ツールとしての AI

アジャイルプロセス協議会
知働化研究会、見積・契約 WG
高橋 雅宏

定年退職した後、ソフトウェア開発の現場から離れた環境で生活する時間が増えた一方で、すこし前から、「生成 AI」という新しいツールの名前を耳にすることが多くなってきました。

AI(人工知能)は、もともと、人間が創り出したものですから、いまさら、生身の頭脳とどちらが優れているか、というような議論は、無意味です。(勿論、生身の頭脳の方が優れていますので)

それどころか、今では AI(人工知能)が、人類にとって、重要なツールとして研究され、成長しているということも、事実です。

さらに、生成 AI は、と言うとさらに進化していて、AI 自身が学習する目的のデータそのものも AI 自身で生成して学習していく、という言わば、自己成長していく AI と位置付けられる状況になってきている事には、驚きました。人間が、創り出した AI というツールは、今も急速な進化の途中だと理解しています。

一方、ソフトウェア開発の分野で見ると、アジャイルプロセス手法も今でもソフトウェアを開発するうえで重要なツール（手法・考え方）の位置づけだと思います。

昨今では、アジャイルプロセス開発やウォーターフォール開発の他にもユーザのニーズに迅速に対応するための開発手法が多数、研究・進化し実践されてきていて、昔、ソフトウェア開発者として、悶々としていた開発環境やベンダとユーザの契約関係が劇的に改善されている現状をたいへんうれしく思っています。

ここで、我々が身近に使っているツールについて、少し考えてみました。

「ツール＝道具」として考えると、ツールには、何かしようとしたときに、効率よく作業できるとか、正確に作れるとか、作業時間を短縮できるとか、ツールを使うことで、何らかのメリットが得られると思います。

さらに、ツールがうまく機能しない場合、たとえば、鉋（かんな）を使って、木の

表面を滑らかにしようとした場合、鉋がその機能を果たさなくなった場合には、「鉋の刃を研ぐ」という作業を通して、ツール（鉋）の機能を再び発揮できるように手入れをします。

これは、生身の人間が創り出したそのツール（鉋）について、ツールの機能・構造・特性を知っているので、どうやれば、そのツールを元通りにできるのか、その手入れ（修繕）の仕方・方法が分かっているからです。

これに対して、新しいツールである AI はどうか、と言うと、生身の人間が創り出した AI（人間が与えたデータで学習させた）にも関わらず、その AI が導き出した結論の根拠を人間が理解できない、という事象が起こっているようです。（いまは、結果を導き出した根拠も答えられる AI も考えられていますが、まだ完成には至っていないと聞いています）

これは、AI が、学習させられた情報だけで判断して答えを出すため、先入観などの人間的な感情をまったく排除した答えであることも、人間が想定外と感じる答えが出てくる、要因の一つではないかと思います。

ただ、このことは否定的にとらえる必要は無く、むしろ、歓迎していいのかなと思います。目的を持って創られた AI は、生身の人間で言えば、その道の専門家と見ることができると思います。

一般的には、突飛な考えと思われる答えが、生身の専門家の口から出たとしても、その理由をその専門家は答えてくれます。さらに、結論に対する疑問点にも答えることが可能だと思います。

ところが、AI は、と言うと答えを出しっぱなしで、その結果を導き出した理由（プロセス）は、答えてくれません。この辺に、AI と生身の人間の違いが顕著に出ているのではないかと思います。

現在も、AI を育成して専門家にさせている分野は、多岐にわたります。

例えば、

- ① 自動運転技術の向上、
- ② 医療診断や治療の分野で医療の質の向上、
- ③ 産業用ロボットや個人向けのロボット利用拡大、
- ④ エネルギー効率と環境への応用、などなど

これからも、我々の多岐にわたる環境に対応する専門家を AI の世界で育成することで、我々の生活は AI によって、改善されていくと思います。

とは言え、AI が出した答えについて、AI が、その答えを導いた根拠を説明できるようになる事は、現在も研究が進められてはいるものの、生身の人間の様に、結果を導いた根拠を完全に説明できる AI は、今後も期待できないのではないかな、と思います。

むしろ、人間が、AI よりも優っている事が、永久に続くために、この一線は、越えて欲しくないと思います。人類の未来が輝くためにも、AI は、あくまでも生身の人間のツールであって欲しいと願っています。



